

創造のことは、いのちの光

(ヨハネ一・一〜五)

「イエス関連の映画は決まって物議を醸すものの、大ヒットになりやすい。それはイエス関連のミュージカルも同様だ。(R. ボウカム) 確かにそうだ。誰が否定してもイエスは西洋、いや世界のアイコンである。ある統計によれば毎日七万人が新たにクリスチャンになっているという。しかもその成長点はアフリカや中国である。確かにイエスは世界を席巻しているのだ。

だがイエスについて書かれた本の混乱ぶりには頭が痛い。冒頭にも引用したボウカムという聖書学者は近著の中で最近主張されたイエス像を多数紹介しているが、そこには「ガリラヤの聖人、終末の預言者、オカルト的魔術師、トランス状態に誘う心理療法士、政治的革命家」などの不思議なタイトルが満載だ。しかし私たちは何よりも聖書自身の証言、特にイエスが神の子キリストであることを人々に信じさせるという目的をもって書かれた(二〇・三二)ヨハネの福音書の劈頭の記述から「イエスとは誰なのか」を学びたい。

一、創造の「ことば」

マタイやルカ福音書はその福音書の劈頭にイエスの系図や誕生物語を置く。即ち人性におけるイエスの記述から記述を

始めるのに対し、第四福音書ではいきなりキリストのことを「ことば」と呼び、彼が父なる神と共に、最初から存在していたことを宣言している。しかしなぜヨハネはイエスを「ことば(ロゴス)」と呼んだのだろうか。ある者はその起源をギリシャ哲学に求め、「宇宙に内在する神的原理」を意味すると考えた。そういうことを勘案してだろうか、中国語などではこの「ことば」を「道」と翻訳している。だがより多くの学者はこの「ことば」を理解する鍵は寧ろ旧約聖書、殊に創世記一章にあると考える。そこには確かに神の創造が「ことば」によつて為された業であることが明確に示されており、ヨハネ一・一〜三節までに示されていることとの並行関係が認められる。創造の「ことば」であるキリスト。これがヨハネの語るイエスの姿である。イエスがこの地に来られたのは今から約二千年前のことだが、彼はその前、いや世界の始まる前から父と共に生きていたと聖書は証言しているのだ。そればかりか「ことば」であるイエス・キリストは創造の業に参与し、実際に私たちを造られた神なのである。確かにイエスは人類の偉大な教

師でもあり、ある意味で革命家であつたらう。しかしそれ以前に彼は私たちを作つた神そのものなのである。

二、「いのち」の光

「ことば」というユニークな表現をもつてみ子による万物の創造について述べたヨハネは、続けて彼の内に「いのち」があつたことを主張する。再び創世記一章を思い出せば、創造の業が始まる前、そこにあつたのは「茫漠として何も無い」状態であり、それは「やみ」と形容されるものであつた。しかし神が「ことば」を発した時、光が生まれ、あらゆるいのちが創造された。よつて「ことば」であるキリストをあらゆるいのちの根源と見るのは妥当である。また彼が神の子であり、いのちの源であるなら、彼が成した様々な奇跡、そしてその頂点にある復活を疑う必然は無くなる。なぜなら彼は「神」なのだから。ヨハネは更に続ける。「やみはこれに打ち勝たなかつた」と。何と云う力強い宣言だろう。罪を犯し墮落した人間の世界には確かに闇が満ちている。一方で企業の内部留保は過去最大となつているのに対し、その果実が庶民に流れることはなく格差社会は広がるばかりだし、その中で誰からも声をかけられず無関心の中で孤独死していく人々も後を絶たない。本当に人間の闇は深い。

しかしどんな小さな光でも、もしそこに光があるならば一瞬にして闇を切り裂くことが出来る。それと同様に救い主イエス・キリストのいのちの光は今日もこの罪の闇の世に輝き続けているのだ。

* * *

法律家から軍人に、更には政治家になつた「彼」は強固な無神論者だつた。政治家としての活動と共に無神論のキャンペーンに奔走していた彼はそれに飽き足らず「ある試み」を始めた。それは「キリスト教撲滅のためのキリスト教完全論破本を書く」というものであつた。彼は欧米の主要な図書館を巡り歩き、果てはイスラエルにまで足を延ばして研究を重ね、いよいよその成果をまとめ上げるべく執筆に着手した。しかしその途中、彼、ルー・ウォーレスの筆は止まつた。十字架上のイエスの祈る様を思い巡らしているなかで、彼はイエスのいのちを体験してしまつたのだ。心の闇は照らされ、彼は光を受け入れた。不思議な事にそれまでの原稿は無駄になつたが、学んだことは益になつた。それをもとに小説を書いたのだ。『ベン・ハー』である。原題は『ベン・ハー；キリストの物語』という。友よ、イエスは神であり、その創造の力で私たちの心を照らす光だ。このイエスを、今信じよう。